〔丙辰紀行〕吉田

江戸より京までの間に大橋四あり、武藏の六郷、三河の吉田、矢矧、近江の勢多なり、ひとり矢矧のみ土橋なれば、洪水によりて絶る事もあり、此比新に板ばしとなりけるにや、爰にしも誰か周處が三害をやめて、留侯が一編を傳むや、略〇下

〔大猷院殿御實紀附錄六〕寛永十一年七月三日、矢作の橋を渡らせ玉ひ、このあたりにいにしへの八橋の跡やあると問はせ玉ふに、略〇下

〔垂加草四〕再遊紀行

矢作橋

因有男豐矢作河、便呼是國號三河、大橋天下莫過此、清世人無憂渡河、

〔東海道名所記四〕矢矧橋、長さ二百八間あり、此橋いにしへは土橋にて侍べりしかば、洪水の時はおしながされて、往來の人渡りかねたる故に、ちかき比より板ばしに成けり、

〔驛路の鈴四〕矢作川、是も水上信州、橋百九拾六間風也、江戸より京までの間に大橋四つ有、六郷吉田、矢矯、勢田也、此矢作の橋、昔は土橋にて有しときく、建武の御時、足利治部大輔尊氏鎌倉に在て、天子の命にたがひしかば、新田左兵衞督義貞節刀使を奉りて東征し、此所にて鎌倉の軍兵と戰ひ、勝て鷺坂まで逃るを追討て、官軍利を得し所也、古歌に、

狩人の矢矯に今夜やどりせばあすや渡覽豐川の水

〔十三朝紀聞七仁孝〕文政十一年七月朔、東海大水、天龍川溢合成湖、流矢矧橋三十許間、

〔遊囊賸記六〕矢作橋ハ古來土橋ナルヲ、神祖ノ御時新ニ板橋トナサシメ玉ヒ、永ク行旅危懼ノ患ナシ、今日ハ太平ノ橋ヲ渡リ、又此橋ヲ過グ、當國ノ三分ノ二ヲ極メタリトイフベシ、岡崎ニ時刻ヲ移シケレバ、日暮テ大濱ニ止ル、